

## 芥川龍之介「蜘蛛の糸」のキアスムス構造と核の機能 —クライマックスにおける逆説の非受容—

Chiasmatic structure and the central element of chiasmus in the Akutagawa's 'The Spider's Thread'  
—Climactic rejection of paradox—

大喜多 紀明

やぐら遺跡伝承文化研究会

Noriaki Ohgita

Folklore and Culture Study Group of Yagura

キーワード：芥川龍之介，蜘蛛の糸，キアスムス，クライマックス

Key words : Ryunosuke Akutagawa, The Spider's Thread, Chiasmus, Climax

### 抄録

キアスムスの核（構造的中央の要素）には物語のクライマックスを表示する機能があるとされている。本稿では、芥川龍之介の短編小説である「蜘蛛の糸」を、まずはキアスムスによる構造であるかの検討をおこなったうえで、当該作品の核が、はたしてクライマックスといえるかの検討をおこなった。その結果、「蜘蛛の糸」はキアスムス構造であること、かかるキアスムスの核がクライマックスであることが確認できた。以上をふまえて、当該クライマックスの範囲を、一般的にクライマックスとされる範囲と比較したところ、厳密には差異がみとめられたものの、概ね同一であることが確認できた。本稿の検討によれば、本作品のキアスムスの核には、御釈迦様が提示した逆説を犍陀多が否定する選択が配置されていることがわかった。本稿は、日本の小説の分析に新たな方法論を提供する試論でもある。

### 1. はじめに

一般的に、小説や映画などのクライマックスの所在や機能への理解は作品鑑賞において重要である。かかる所在や機能の前提となるクライマックスの定義について、例えば二瓶は、「物語全体を通して、あること（中心人物の心）が最も大きく変わるところ」と述べた<sup>[1]</sup>。本稿ではこれを「二瓶の定義」と呼ぶことにする。なお、二瓶の定義における「中心人物」とは、「物語全体を通して、気持ちやその変化がいちばん詳しく書かれている人物」<sup>[1]</sup>のことである。ここで、物語で「最も大きく変わるところ」の判別には、中心人物の「行動や心情、人物関係の変容」<sup>[1]</sup>の読解が必要である。二瓶の定義は、例えば上原論文<sup>[2]</sup>や荒木論文<sup>[3]</sup>などの国語科の実践教育研究に援用された。荒木は、かかる実践が「様々な作品に汎用できる読み方」<sup>[3]</sup>であると述べ、当該定義の有効性を示した。

一方、倉又は、小学生を対象とした読解での二

瓶の定義の援用でみとめられた課題を次のように述べた<sup>[4]</sup>。

実践する中で、この定義だけでは論点にずれが生じやすかった。また、「最も大きくかわるところ」という抽象的な表現が児童らには理解しづらかった。それは「三年とうげ」の実践のように、中心人物の心情の変化の大きさよりも、最も気持ちが高揚している文に着目しやすかったことから分かる。

一般的にも、クライマックスの特定は、読者の視点や読解力などに左右される。一方で、読者の主観性が介入する余地は、作品の解釈論における多様性を担保する機能があるといえる。他方では、こうした余地は、恣意的解釈論の舞台ともなり得る。周知のように、解釈上の余地をどうとらえるかは、国語教育におけるいわゆる正解到達主義と

正解到達主義批判およびそれらの超克のための議論<sup>[5][6]</sup>の舞台でもある。

そもそも、国語教育においてクライマックスの概念を提唱したのは大西である<sup>[7]</sup>。大西は、小説の読み方指導において「構造読み」→「形象読み」→「主題読み」という三段階の構想を述べた。また、「構造読み」における作品構造の全体像をつかむ必要性とともに、クライマックスが、文脈の後半における「山場の部」のなかで位置づけ、「発端」、「山場のはじまり」、「結末」との関連から読み取る手法を提示した。なお、大西におけるクライマックスの定義は、以下のAとBである<sup>[7]</sup>。

A:「対立する諸勢力、諸性格によってひきおこされる矛盾の諸現象の流れ(体系)」＝「筋」における最も緊張を高めた頂点。

B:「筋」が解決から破局へ、あるいは、破局から解決へと転化した点。

さらに、大西は、[7]の61頁で、志賀直哉の「暗夜行路」におけるクライマックスの同定に際し次のように述べた。

例えば、先の例で、「謙作はおとなしいこと。おかあさんの言う事をよくきくのネ」において、前半と後半では、後半の方がクライマックスだと主張したり、後半でも「よくきく」の語がクライマックスだと主張する生徒もある。こういう場合、クライマックスは、一文をとる。つまり「謙作は……よくきくのネ」の「」の一文をクライマックスとするという約束が必要だと思われる。低学年ほど、そういうきっちりした約束をしなければ、生徒の理解に混乱が起るのである。

つまり、大西は、クライマックスの曖昧性を前提に、国語教育の実践の観点からクライマックスが一文であることの必要性に言及した。

二瓶や阿部<sup>[8]</sup>の議論はこうした大西の知見を引き継いだものである。つまり、二瓶や阿部の場面構成論は、そもそも大西が提示した「構造読み」における、「発端」、「山場のはじまり」、「山場の部」、「結末」の4部構造を受けたものである。二瓶の場面構成論は、「大きな設定場面」、「出来事の展開場面」、「クライマックス場面」、「その後の場面」の4場面からなる。なお、二瓶の構成論は大西の提示

を小学生向けに言い換えたものであるといえる。また、阿部の場合は、大西の提示を「導入部」、「展開部」、「山場」、「終結部」と言い換えた<sup>[8]</sup>。いずれにせよ、こうした場面構成論は、統辞的連続性を前提とした構造化であり、形態論の一種でもある。ここで、統辞的連続性における構成要素としてのクライマックス(＝山場)は、クライマックス論において一般的な捉え方であるといえる<sup>[9]</sup>。

ところで、キアスムスとは、聖書やギリシア・ラテンの古典文学で用いられたレトリックのことであり<sup>[10]</sup>、こうした古典文学の構造を分析するための道具としてしばしば使用されてきた<sup>[11][12]</sup>。しかしながら、日本の物語分析でこの手法が使用された例は多いとはいえない<sup>[12]</sup>。このキアスムスによる分析には、当該物語のクライマックスの所在と機能を構造的に示すことができるという報告がある<sup>[13]</sup>。キアスムスによる構造化は、例えば基本4場面構成の場合のような統辞的連続性にクライマックスが組み込まれるとはいえず、次節で述べるように、文学的なパターンや対称性を前提としている。大林は、キアスムスの下位概念である裏返し構造が、統辞的・系列的の双方を統合した視点を持つことを指摘した<sup>[14]</sup>。かかる指摘はキアスムスにも当てはまるものである<sup>[15]</sup>。以上は、クライマックスの特定においても、二瓶の定義のような視点とは異なる視点をキアスムスが提供する可能性を意味するものである。つまり、キアスムスは、二瓶や阿部の構造とは、構造化のアプローチが異なる。かつ、こうしたアプローチは一般的に広く認知されているとはいいたい。本稿の目的は、かかるキアスムスによる分析法に注目し、芥川龍之介の短編小説「蜘蛛の糸」<sup>[16]</sup>におけるクライマックスの所在と機能を検証するところにある。

## 2. キアスムスと核

キアスムスとは、下記のような、複数組の要素対が同心円状に配列した形式のことをいう。

$$A \rightarrow B \rightarrow \dots \rightarrow X \rightarrow \dots \rightarrow B' \rightarrow A'$$

ここで、AとA'、BとB'は、キアスムスを構成する要素対である。なお、要素対の数は、2組以上である。キアスムスの構造上の中央に位置するX(ギリシャ語の「カイ」)は、キアスムスの「核」と呼ばれる。ここで、核は、上述のような組を形成しな

い場合と、下記のような組を形成する場合とがある。

$$A \rightarrow B \rightarrow \dots \rightarrow X \rightarrow X' \rightarrow \dots \rightarrow B' \rightarrow A'$$

研究者によっては、組を形成しない形式を「集中構造」と呼ぶことによりキアスムスと区別する場合と、かかる区別をしない場合とがあるのだが、本稿では、双方を区別しないことにする。以上をふまえ、本稿では、キアスムスの構造上の中央に位置する X あるいは X・X' を「核」と呼ぶことにする。

松村は、キアスムスの使用がみとめられる文体事象の種類が、旧約聖書、新約聖書、ギリシア、ラテン、メソポタミア、ウガリット、ゲルマン、キリスト教、イラン、アラブ、中国、日本、ハリーポッターなどの文献であることを述べた<sup>[12]</sup>。なお、日本の文献として松村は、「古事記」とアイヌ口承文芸を挙げた<sup>[12]</sup>。そもそも、こうしたキアスムスに関する分析的な研究は主に聖書学や西洋古典学で進められてきており<sup>[12]</sup>、とりわけ聖書を題材とした知見が質量ともに最も充実している<sup>[17]</sup>。

例えば、新約聖書に収納された「ピリピ人への手紙」は下記のキアスムス構造である<sup>[13]</sup>。

- A (1.1-2) Opening Greetings
- B (1.3-11) Prologue
- C (1.12-26) Comfort/Example
- D (1.27-2.4) Challenge
- E (2.5-16) Example / Action
- X (2.17-3.1a) Midpoint
- E' (3.1b-21) Example / Action
- D' (4.1-5) Challenge
- C' (4.6-9) Comfort/Example
- B' (4.10-20) Epilogue
- A' (4.21-3) Closing Greetings

Luter et al は、ピリピ人への手紙が、A・A'、B・B'、C・C'、D・D'、E・E' という合計 5 対の要素対を持ち、X を核とするキアスムスからなることを述べた<sup>[12]</sup>。つまり、A・A' では「Opening Greeting」と「Closing Greeting」が、B・B' では「Prologue」と「Epilogue」が、C・C' では「Comfort/Example」と「Comfort/Example」が、D・D' では「Challenge」と「Challenge」が、E・E' では「Example/Action」と「Example/Action」がそれぞれ対応している。以上のように、キアスムスは、文学的なパターンや対

称性を前提に構成されている。また、X「Midpoint」に関しては、以下の説明をした<sup>[13]</sup>。

Since the centre of the chiasm is the climax, it should be a passage worthy of that position in terms of its significance. With this proposed outline of Philippians, the section 2.17-3.1a, which has long baffled commentators, moves into its originally-intended position of prominence and its significance is clearly seen.

このように、キアスムスの構造上の中央に位置する X (つまり核) が、このテキストにおけるクライマックスに相当することを Luter et al は主張した。本稿では、かかるキアスムスの核がクライマックスに相当するとする説を「核＝クライマックス説」と呼ぶことにする。ここで、キアスムスが文学的なパターンや対称性を前提に構成されているからには、当然に、核および核をふまえたクライマックスの特定も、かかる構成上の前提に立脚している。

こうしたキアスムスの核とクライマックスを関連付けた論文は散見できる。例えば、McCoy は次のように述べた<sup>[18]</sup>。

One scholar who has specialized in the literary form and structure of the Old Testament is convinced Genesis through Deuteronomy plus the book of Joshua (all six of which he collectively labels “the Hexateuch”) form one enormous macrochiasm with the covenant at Sinai (Exodus 19:3-Numbers 10:10) as the central and climactic (X) component.

ここでの議論は、核＝クライマックス説を前提としている。さらに、森は、キアスムスにおける核の機能について以下のように言及した<sup>[19]</sup>。

さて、何対かの対応に囲まれて構造の中央に位置しているのが「核」である。テキストの各要素は対応を重ねながら、この核にむかって集中する。そして、しばしばそこにテキストの隠れた意図の集約的表現が見受けられる。その意味では、核はテキストの構造上の中心としての形式的機能を持つだけでなく、テキストに隠されたメッセージの指標として内容的機能をも担っているといえよう。

つまり、核にはストーリー全体の集約的表現が描かれており、テキストにおける構造上の中心としての形式的機能のみならず、テキストにおけるメッセージを表示する内容的機能としての役割がある。こうした内容的機能は、ストーリーにおけるクライマックスと深く関連しているといえる。

聖書以外でも、例えば、仏教における前世物語（本生譚）の一種であるヴェサンタラジャータカ（Vessantara Jātaka）をキアスムスの観点から分析した Shi は、キアスムスの核がクライマックスであることを前提とする議論を展開した<sup>[20]</sup>。

さらに、キアスムス論が日本の物語の分析に援用された事例は、上述の大林論文が提示したものなどがあるものの決して多いとはいえない。また、キアスムスの核とクライマックスの関係から論じた事例は大喜多論文<sup>[15][21]</sup>などに限定されている。

ところで、上述のキアスムスがみとめられるテキストは、大きくは新・旧約聖書や仏典のような宗教経典と、例えばハリポッターや大林が例示した「イザナキの黄泉国訪問」のような「行きて帰りし物語」<sup>[22]</sup>の構造を持つストーリーに類別できる。

宗教経典は、「神」や「仏」が介在することによる人知を超越した因果が描かれる。一方、非宗教経典は、人知を超越したことを描く論理構成ではなく、むしろ緻密な描写に依存しているといえる。この点について、例えばアウエルバッハは、聖書の技巧と西洋文学におけるリアリズム的技巧を比較した<sup>[23]</sup>。つまり、聖書は具体的な描写よりも象徴性や隠喩性、表現的余白や曖昧さがみとめられるのだが、例えばホメロスではむしろ徹底した具体性に基づく表現により構成されている。宗教経典特有のこうしたリアリズム的な因果関係からの超越性は、テキストにキアスムスが出現する一因となり得るといえる。一方、「行きて帰りし物語」の場合は、そもそも物語の前半と後半が反転しやすく、こうした構成上の特徴がキアスムス出現の一因となることが予想できる。

以上は、宗教経典と「行きて帰りし物語」では、同じくキアスムスが出現するのだが、その出現の機序が異なる可能性があることを示唆している。なお、このことは、宗教経典であり、かつ「行きて帰りし物語」である物語が存在しないことを主張しているのではない。さらに、宗教経典や「行きて帰りし物語」でもない近代リアリズム小説においては、人間が想定し得る因果により構成されてい

るので、キアスムス構造をとる必要がない可能性がある。

キアスムスという用語自体も、事実上、日本ではほとんど認知されていない。本稿は、日本の物語の分析に新たな方法論を提供する試論でもある。

### 3. 核とクライマックス

2節では、キアスムスの核の機能に関する説明を示した。まず、Luter et al 論文や McCoy 論文は、核＝クライマックス説を主張した。さらに、森論文は、核には、当該テキストにおける構造上の中心としての形式的機能とメッセージを表示する内容的機能としての役割があることを主張した。つまり、以上によれば、キアスムスの核には、当該テキストにおける①クライマックスとしての機能、②形式的中央としての機能、③中心メッセージを表示する機能がある。

一方、確かに Luter et al や McCoy は、キアスムスの核がクライマックスであると主張したのだが、そもそもすべてのキアスムスの核が等しくクライマックスとして認定できることがすでに検証されているわけではない。例えばシェイクスピアの「マクベス」におけるセリフ“fair is foul and foul is fair.”は明らかなキアスムスである<sup>[24]</sup>。

A fair  
X foul  
X' foul  
A' fair

ここで、核に相当する“foul”はクライマックスとはいいがたい。つまり、キアスムスは、あくまでも文学的パターンと対称性により構成されているのであり、核がクライマックスであることがキアスムスにおける必須要件ではない。

### 4. 「蜘蛛の糸」におけるキアスムス構造

2節で述べたように、日本の作品についてのキアスムスの観点による分析としては、「古事記」やアイヌ口承文芸を対象としたものがある。加えて、芥川作品では、キアスムスの構造上の下位概念<sup>[15]</sup>である裏返し構造<sup>[14]</sup>を当てはめる観点から、短編小説「トロッコ」の分析がおこなわれた<sup>[25]</sup>ものの、本稿で扱う「蜘蛛の糸」に関する分析は実施されていない。以上をふまえ、本節では、「蜘蛛の糸」

の構造を提示することにする。

以下は、「蜘蛛の糸」の全文である<sup>[6]</sup>。なお、引用文中のアルファベットおよび記号は筆者によるものである。

一

[A] ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっいらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。[A]

[B] やがて御釈迦様はその池のふちに御佇みになって、水の面を蔽っている蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当って居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はっきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、犍陀多と云う男が一人、ほかの罪人と一しょに蠢いている姿が、御眼に止まりました。この犍陀多と云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございしますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございします。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這って行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗にとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございします。

御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事をした報には、出来るなら、この男を地獄から救い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそっと御手に御取りになって、玉のような白蓮の間から、遥か下にある地獄の底へ、まっすぐ

にそれを御下しなさいました。[B]

二

[C] こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しょに、浮いたり沈んだりしていただでございます。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくら暗からぼんやり浮き上がっているものがあると思いますと、それは恐い針の山の針が光るのでございますから、その心細さと云ったらございませぬ。その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞えるものと云っては、ただ罪人がつく微な嘆息ばかりでございます。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはてて、泣声を出す力さえなくなっているのでございましょう。ですからさすが大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかった蛙のように、ただもがいてばかり居りました。

ところがある時の事でございます。何気なく犍陀多が頭を挙げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、すると自分の上へ垂れて参るのではございせんか。[C] [D] 犍陀多はこれを見ると、思わず手を拍って喜びました。この糸に縋りついて、どこまでものぼって行けば、きっと地獄からぬけ出せるのに相違ございませぬ。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ましょう。そうすれば、もう針の山へ追いつけられる事もなく、血の池に沈められる事もある筈はございませぬ。

こう思いましたからは、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございますから、こう云う事には昔から、慣れ切っているのでございします。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございしますから、いくら焦って見た所で、容易に上へは出られません。ややしばらくのぼる中に、とうとう犍陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなってしまいました。そこで仕方がございませぬから、まず一休み休むつもりで、糸の途中にぶら下りながら、遥かに目の下を見下しました。[D]

[E/]すると、一生懸命にのぼった甲斐があって、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかかくれて居ります。それからあのぼんやり光っている恐しい針の山も、足の下になってしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。犍陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。[E] [X/]ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限もない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、しばらくはただ、莫迦のように大きな口を開いたまま、眼ばかり動かして居りました。自分一人でさえ断れそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪える事が出来ましょう。もし万一途中で断れたと致しましたら、折角ここへまでのぼって来たこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大変でございます。[X] [X']が、そう云う中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這い上って、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せっせとのぼって参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違いありません。[X']

[E']そこで犍陀多は大きな声を出して、「こちら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」と喚きました。[E']

[D']その途端でございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下がっている所から、ぷつりと音を立てて断れました。ですから犍陀多もたまりません。あつと云う間もなく風を切って、独楽のようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。[D']

[C']後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。[C']

三

[B']御釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらっしやいましたが、やがてが血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございましょう。[B']

[A']しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足のまわりに、ゆらゆら萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽ももう午に近くなったのでございましょう。[A']

以下、引用文中に付した [N/] と [N'] あるいは [N''] と [N''] で挟まれた範囲をそれぞれ N あるいは N' と呼ぶことにし、A と A', B と B', C と C', D と D', E と E', X と X' がそれぞれどのような関連であるかの検討をおこなう。

#### ◆A と A'

「蜘蛛の糸」は三章構成になっている。一章と三章は極楽の描写であり、二章は地獄の描写であることから、生野は、当該作品が、一章と三章が首尾照応することによる額縁の構成であると主張した<sup>[23]</sup>。かかる額縁に相当する一章には A と B が、三章には B' と A' が配置されている。それ以外の C ~ C' までは額縁の中身に相当する二章である。

ここでは A・A' と B・B' をそれぞれ評価することにする。A には、御釈迦様が極楽の蓮池のふちで、独りでぶらぶらと歩いていること、蓮の花が玉のようにまっ白であること、金色の蕊から何ともいえないよい匂いが溢れていることが述べられている。また、極楽の時間は朝である。それに対し、A' には、蓮池の蓮が白い花を咲かせていること、金色の蕊から何ともいえないよい匂いが溢れていることが述べられている。また、蓮の花が御釈迦様の足元にあることから、御釈迦様が蓮池のふちにいることが見受けられる。一方、極楽の時間は午近くである。生野が指摘したように、以上

は照応関係である。

範囲	御釈迦様の所在	蓮	蓮の蕊	極楽の時間
A	蓮池のふち	白い花	よい匂い	朝
A'	蓮池のふち	白い花	よい匂い	午近く

#### ◆BとB'

Aの場面では、御釈迦様の関心は地獄にはない。それに対し、Bでは、御釈迦様の関心が地獄とそこにいる犍陀多に向けられる。一方のB'では、御釈迦様の関心が地獄の犍陀多に留まっているのだが、A'では、御釈迦様の関心についての描写はなく、むしろ、変わらない極楽の日常が描かれている。以上より、BとB'はAとA'とともに額縁的構成の額縁部に含まれているものの、本稿では、御釈迦様の地獄への関心に注目し双方を区別した。

Bでは、それまで向けられていなかった御釈迦様による地獄への関心が描写されている。御釈迦様はとりわけ犍陀多に注目した。彼は多くの悪事をしたのだが蜘蛛は助けた。それに対し、御釈迦様は「そうしてそれだけの善い事をした報には、出来るなら、この男を地獄から救い出してやろう」と考えた。そのうえで地獄に蜘蛛の糸を垂らす決断をした。つまり、御釈迦様はあくまでも犍陀多の「善い事」を注目し、そのことの「報」として蜘蛛の糸を垂らしたのである。一方、B'では、御釈迦様による犍陀多への注目が解除された様子が述べられている。その理由については「自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまった」と書かれており、御釈迦様はそれを見て「浅間しく思召された」とある。つまり、御釈迦様による犍陀多への注目の解除の理由は、彼の無慈悲の「心相当な罰」であった。かつ、御釈迦様はそれを見てあさましく思った。

範囲	御釈迦様による注目	注目の視点	犍陀多に向ける気持ち
B	開始	犍陀多の善行	慈悲
B'	解除	犍陀多の悪行	あさましさ

つまり、Bでは犍陀多の良い点に、逆にB'では犍陀多の悪い点に焦点を絞っているともいえる。

#### ◆CとC'

Cには、地獄の犍陀多に一筋の蜘蛛の糸が垂れ

てきた様子が書かれている。それに対し、C'には、切れた蜘蛛の糸が地獄の空に短く垂れている様子が書かれている。双方はともに蜘蛛の糸の様子であるが、Cは犍陀多を救おうとする御釈迦様の意思が背後にあり、かつ動的である。また、この蜘蛛の糸には救いの希望の意味があるといえる。それに対し、C'はかかる御釈迦様の意思とは無関係となり、かつ静的である。また、この蜘蛛の糸には救いの希望の喪失の意味があるといえる。

範囲	御釈迦様の意思	様子	表象
C	内在	垂れてくる(動的)	希望
C'	不在	垂れている(静的)	希望の喪失

#### ◆DとD'

Dには、犍陀多が蜘蛛の糸を登る様子が描かれている。かかる上昇は彼で意思で実行できるのであるが、その速度は緩慢である。対し、D'には蜘蛛の糸が切れることにより犍陀多が落下する様子が描かれている。ここでの落下は犍陀多の意思による統制を喪失しており、速度は急速である。

範囲	犍陀多の移動
D	緩慢な上昇・意思による統制
D'	急速な落下・意思による統制の喪失

#### ◆EとE'

EとE'では、犍陀多の発声の様子が描かれている。Eでは、犍陀多は「しめた。しめた。」と笑っているのに対し、E'では大きな声で「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」と喚いている。この作品では、登場人物の実際の発声が記された箇所はここだけである。

範囲	犍陀多の発声
E	笑い
E'	喚き

#### ◆XとX'

XとX'には、罪人たちが蜘蛛の糸をうようよと登ってくる様子を犍陀多が目撃したことが述べられている。まずXではこれを発見し、X'では「今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違いありません」と書

かれており、韃陀多の決断が迫られていることが述べられている。

範囲	登る人々
X	発見
X'	決断

#### ◆図式

以上の A と A', B と B', C と C', D と D', E と E', X と X' の要素どうしの関係を図式化すると下記のようなになる。

- A 極楽のお釈迦様：朝
- B 地獄へのお釈迦様の関心：見る  
韃陀多：善い事の報
- C 蜘蛛の糸の様子：垂れてくる
- D 韃陀多の移動：緩慢・上昇
- E 韃陀多の発声：笑う  
X 登る人々：発見  
X' 登る人々：決断
- E' 韃陀多の発声：喚く
- D' 韃陀多の移動：急速・落下
- C' 蜘蛛の糸の様子：垂れている
- B' 地獄へのお釈迦様の関心：見ない  
韃陀多：心相当の罰
- A' 極楽のお釈迦様：午

ここで、各要素が同心円状に配列していることから、当該作品はキアスムス構造により構成されているといえる。また、当該キアスムスにおける核は X・X' である。

キアスムスが出現する理由について、2節では、宗教經典における、「神仏」の介入にともなう日常の因果からの超越性と、「行きて帰りし物語」の構成上の特性という二種類の要因の仮説を提示した。ここで、「蜘蛛の糸」は、極楽のお釈迦様（「神仏」に相当する）が地獄にいる韃陀多に介入する物語ではあるが宗教經典ではない。一方、韃陀多が地獄の血の池から、垂れてきた蜘蛛の糸に登ることで離別し、後に落下することで血の池に戻るストーリーであるので、「行きて帰りし物語」の形式であるといえる。したがって、この作品にキアスムスが出現する機序は、「神仏」の介入によるものではなく、「行きて帰りし物語」の構成上の特性に由来するものであるといえる。

#### 5. 「蜘蛛の糸」におけるキアスムスの核の機能

本節では、4節で示した「蜘蛛の糸」のキアスムスにおける X・X' がクライマックスといえるか否かを、当該 X・X' の機能の検討からおこなうことにする。

まず、「蜘蛛の糸」のクライマックスは X・X' である。ここで、核＝クライマックス説を援用することにより、テキスト全体における X・X' の機能を検討してみたい。まず、X・X' は「蜘蛛の糸」のキアスムスの形式的な中央に位置している。この点は、上述の②の機能に相当するものである。つまり、X・X' を中心に、A と A', B と B' などの要素対が同心円状に配列しているのである。本節では、キアスムスの構造上の前半に配置された A, B, C, D, E, と、構造上の後半に配置された A', B', C', D', E' におけるそれぞれの対応の種類の類型化を試みることにする。

#### ◇A と A'

4節で述べたように、A・A' は当該物語の額縁の一部を構成している。また、A と A' では、御釈迦様の所在、蓮、蓮の蕊、極楽の時間がそれぞれ照応関係である。ここで、極楽の時間については「朝」と「午」で違いがあるものの、他については「蓮池のふち」、「白い花」、「よい匂い」で同一である。A と A' の間では御釈迦様は韃陀多の動向に注視するのであり、その期間は「朝」から「午」という長い時間である。こうした時間経過は、むしろ極楽の不変さを強調する効果があるといえる。以上は、当該作品の額縁部は、むしろ B・B' と切り分け、不変さを強調する A と A' のみが額縁であると考えべきことをここでは示唆している。

#### ◇B と B'

B と B' では、「御釈迦様による注目」、「注目の視点」、「韃陀多に向ける気持ち」が描かれているのだが、それぞれの「開始」と「解除」、「韃陀多の善行」と「韃陀多の悪行」、「慈悲」と「あさましさ」はすべて対立的な関連である。

#### ◇C と C'

C と C' では、蜘蛛の糸における「御釈迦様の意思」、「様子」、「表象」が描かれており、それぞれが「内在」と「不在」、「垂れてくる（動的）」と「垂

れている(静的)、「希望」と「希望の喪失」という対立的な要素により構成されている。

#### ◇DとD'

DとD'では、「犍陀多の移動」がテーマであり、Dにおける犍陀多の「緩慢な上昇」と上昇における「意思による統制」とD'における「急速な落下」と、かかる落下の際の「意思による統制の喪失」が対立的に述べられている。

#### ◇EとE'

EとE'では、「犍陀多の発声」が描かれている。ここで、Eは「笑い」であるが、E'は「喚き」であり、双方は対立的である。

以上をまとめれば、BとB'、CとC'、DとD'、EとE'の関係はすべて対立的である。また、AとA'は、御釈迦様が犍陀多に関心を向ける前と関心を喪失した後と位置づけられるので、事実上の額縁部に相当する。つまり、当該作品における構造上の前半と構造上の後半の内容は、X・X'を起点に反転している。換言すれば、当該作品のキアスムスの核には、物語を反転させる機能があるといえる。

#### ◇XとX'

続いて、X・X'そのものについてである。Xでは、犍陀多は「登る人々」を「発見」する。その直後のX'では、犍陀多は、かかる「登る人々」への対処の「決断」が迫られる。ここでの選択の第一番目は、「登る人々」を排除する「決断」である。かかる「決断」の根拠は、多くの人々が登ることにより、蜘蛛の糸に過度な負荷が掛かって切れることを心配するところにあるといえる。もう一つの選択は、「登る人々」を排除しない「決断」である。その場合、さらに多くの人々が登ることによって、蜘蛛の糸にはよりいっそうの負荷がかかり、それによって増大するリスクを受容することである。結果的に犍陀多は前者を選択したのであり、それにより物語は反転した。当該選択は、物語全体のストーリー構成そのものに関わる根幹的なものであったのであり、以上は、当該箇所が当該物語におけるクライマックスとして比定し得る根拠となるといえる。

## 6. 核における逆説

2節では、キアスムスの核がクライマックスとして位置付けられることがあることを紹介した。さらに、森によれば、キアスムスにおける核は、テキストの構造上の中央としての形式的機能と、テキストの内容的機能(つまり、ストーリー全体の集約的表現を表示する機能)を担っている<sup>[19]</sup>。5節では、「蜘蛛の糸」の核(X・X')が当該物語のクライマックスとして評価できること、かつ、テキストの構造上の中央としての形式的機能があることを述べた。また、当該物語のストーリー構成がX・X'における犍陀多の決断に依存していることから、当該X・X'が、当該物語のストーリー全体の集約的意味を持つことを示唆している。

ここで、X・X'における犍陀多の実際の選択は「登る人々」を排除する「決断」であったのだが、本節では、かかる排除をしない「決断」の場合について検討してみる。そもそも実際の蜘蛛の糸には、人間がぶら下がることのできる強度が到底ない。こうした、むしろ脆弱ともいえる糸を犍陀多は登っていた。さらに、Xにおいて、犍陀多は、下方に連なり登る人々を発見する。犍陀多は、糸が切れることによる落下の危機を感じたのである。ここで、「登る人々」を排除しない選択は、すなわち自らの落下を受容することでもある。つまり、排除しない選択は、「救い」の機会を内心において否定することである。ここには、かかる自己のみの「救い」の否定こそが、むしろ「救い」の成就であるという、御釈迦様による逆説が提示されている。そして、かかる「登る人々」を排除しない選択により自己の「救い」を否定した犍陀多は、みごとに糸に登りきること、なんらかの「救い」を得たに違いない。以上のように、この作品のキアスムスの核には、御釈迦様が提示した逆説を犍陀多が受容するか否かの選択が配置されており、かかる逆説の受容の否定が、当該作品における集約的意味であるといえる。

こうしたキアスムスの核に逆説の受容の可否が配置された作品には、例えば旧約聖書の「イサク燔祭物語」がある。「イサク燔祭物語」は、創世記22章1節から19節に掲載されている。以下は、大喜多論文<sup>[15]</sup>に記載されたあらすじである。なお、あらすじには、アルファベット・記号が付されている。

[A] アブラハムは、一人息子であるイサクを燔祭として捧げるように、神から命令された。翌朝、アブラハムはイサクを連れ、二人の従者とともに神の命じられたモリヤ山に向かった。

[A] [B] アブラハムは二人の従者を待機させ、イサクとともに燔祭をおこなう場所に向かった。イサクは、本来燔祭とすべきである小羊の所在をアブラハムに問うた。アブラハムは、当該小羊は神が備えるであろうことをイサクに告げた。

[B] [C] アブラハムはイサクを祭壇に据え、燔祭として殺そうとした。[C] [C'] その時、神の使いが、かかる殺害を止めた。[C'] [B'] アブラハムは、角を藪にかけた雄羊を見つけ、それをとらえ、燔祭とした。[B'] [A'] 神の使いは、アブラハムが言葉に従ったことを以て、彼に祝福を授けた。アブラハムは従者たちのもとにもどり、ともにベエルシバへと行った。  
[A']

この箇所について、大喜多は下記のキアスムスを提案した<sup>[15]</sup>。なお、ここでの C・C'はこのキアスムスにおける核である。

- A 神の命令 <提示>
- B 本来的燔祭 <否定>
- C 殺害 <実行>
- C' 殺害 <実行の否定>
- B' 本来的燔祭 <否定の否定>
- A' 神の命令 <成就>

この物語は、アブラハムが、アブラハムにとっての愛児であるイサクを燔祭として捧げるようにとの神の命令を受けるところから始まる。アブラハムは逡巡したが、ついにイサクを祭壇に乗せ、これを殺害しようとする。ところが、神の使いはアブラハムの実行を止め、むしろ、神はアブラハムに祝福を授与した。ここでの、アブラハムによるイサク殺害の決断とその阻止が、当該キアスムスの核に相当する。アブラハムにとって、イサクを燔祭として捧げることは、自己の否定（つまり、アブラハムの表層的「救い」の否定）を意味する。また、天の使いによる、かかる殺害の阻止は、アブラハムによる自己の否定の否定を意味する。それにより、神はアブラハムに、より深層的な「救い」を授与した。つまり、神はアブラハムに逆説の受容

を要請した。そして、アブラハムはかかる要請を受容することで、神の報酬を授与され得る人物になったのである。一方、犍陀多の場合は、逆説を受容せず、むしろ御釈迦様の報酬を授与され得る人物になることができなかった。

なお、「イサク燔祭物語」は宗教經典である。かつ、ストーリー自体が、従者たちと別れ、アブラハムがイサクを連れて燔祭をおこなう場所に行き、再び従者たちの所に帰るのであるから、「行きて帰りし物語」でもある。したがって、この物語にキアスムスがみとめられる理由は、宗教經典と「行きて帰りし物語」の双方によるものであるといえる。よって、「蜘蛛の糸」とはキアスムス発生機の機序がまったく同一であるとはいえない。

## 7. クライマックスの比較

1節では、作品のクライマックスが「物語全体を通して、あること（中心人物の心）が最も大きく変わるところ」であるという二瓶の定義を紹介した。

「蜘蛛の糸」における中心人物は犍陀多である。かかる犍陀多の心が大きく変わるところは、まずは、上方から垂れてくる蜘蛛の糸を発見する場面である。ここでは、犍陀多は他の地獄の住人とともに「死にかかった蛙」のような状態から一転し、「思わず手を拍って喜ぶ」状態へと移行した。もう一つの箇所は、犍陀多が、蜘蛛の糸に連なり登る人々を発見した場面である。ここでは、それまで「何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた。」と笑う状態であった犍陀多は、発見をきっかけに「驚いたのと恐いので、しばらくはただ、莫迦のように大きな口を開いたまま、眼ばかり動かして居る状態となり、さらには、「大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」と喚く状態へと移行する。以降には、犍陀多の心の変化をあらわす表現は作品中にはない。ここで、第一番目の変化は、蜘蛛の糸を発見しそれに登るきっかけとなる箇所であり、心の大きな変化であるといえる。しかしながら、実際のところは、あくまでも物語が進行するきっかけが提示された箇所である。本作品における犍陀多の心の変化が最も大きいところは第二番目の箇所である。つまり、二瓶の定義によれば、当該作品のクライマックスは、E・X・X'・E'の範囲である。

一方、「蜘蛛の糸」のクライマックスについて、生野は、当該作品の材源であるとされる「因果の小車」との対比のなかで次のように述べた<sup>[26]</sup>。

以下には、作品のクライマックスの一要素を抜き出して対比する。

『因果の小車』の、

『去れ去れ此糸はわがものなり』と覚えず絶叫したりしかば、糸は立刻に断絶して其身はまた旧の奈落の底で落ちたりける。」

とある部分を、芥川は、

「そこで犍陀多は大きな声を出して、『こら罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼって来た。下りろ。下りろ。』と喚きました。

その途端でございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下っている所から。ぷつりと音を立てて断れました。ですから犍陀多もたまりません。あつと云う間もなく風を切って、独楽のようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。」

と作り替えている。両者を対比すれば、一見して分かるように芥川は原作の簡潔な叙述に説明を加えると同時に、視覚的な要素を加えることによって情景を豊かに描写している。

つまり、生野は、当該作品のクライマックスが、犍陀多が蜘蛛の糸の上で、後から登ってきた罪人たちに喚き、糸が切れる箇所であるとしたうえで、材源作品の当該箇所に芥川が装飾を施したことを述べた。一般的にみても、「蜘蛛の糸」のクライマックスがこの付近であることについてはほとんど争いがないであろう。

上述のように、生野は当該作品のクライマックスが、糸に連なり登る人々を発見した犍陀多が大きな声を出し喚く場面からまっさかさまに落ちる場面までとした。つまり X・X'・E' の範囲である。ただし、生野論文<sup>[23]</sup>には、当該箇所がクライマックスである理由が明示されているわけではない。

核＝クライマックス説に基づけば、「蜘蛛の糸」のクライマックスは X・X' である。ここで、上述の二瓶の定義に基づく場合にせよ、生野の説にせよ、X・X' の範囲を内包している。厳密に言えば三者における範囲の差異があるものの、いずれにせ

よクライマックスが X・X' を中心とする範囲であることが確認できる。

ところで、前述のように、近代リアリズム小説は強固な因果関係により統辞的連続性が構成されており、キアスムス構造をとる必要性がない構造である可能性があることを述べた。同様に、「蜘蛛の糸」においても、全体的には「行きて帰りし物語」の形式であるのだが、犍陀多の物語においては因果関係により展開されている。つまり、「行く」前と「帰りし」後は強固なキアスムスの対応関係が成立するといえるが、犍陀多の物語自体は因果関係から統辞的に構成されており、キアスムスを構成する必要性が減少する範囲である可能性がある。こうした点は、本稿のクライマックスの範囲が、二瓶の定義や生野論文におけるクライマックスと一致しない原因となり得る。なお、キアスムスの対応要素として成立するか否かの解釈には恣意性が反映しやすい。この点は、本稿における方法論上の課題である。

## 8. おわりに

Luter et al 論文<sup>[13]</sup>によれば、キアスムスの核にはクライマックスを表示する機能があった。McCoy 論文<sup>[18]</sup>は、かかる主張を前提に、物語の構造分析をおこなった。本稿では、かかる核＝クライマックス説に依拠した主張をふまえ、芥川龍之介の短編小説である「蜘蛛の糸」を、まずはキアスムスによる構造であるかの検討をおこなったうえで、当該作品の核が、はたしてクライマックスといえるかの検討をおこなった。その結果、「蜘蛛の糸」はキアスムス構造であること、かかるキアスムスの核に相当する X・X' がクライマックスであることが確認できた。以上をふまえ、当該クライマックスの範囲を、二瓶の定義に基づくクライマックスおよび生野が示した当該範囲と比較したところ、厳密には差異がみとめられたものの、いずれも X・X' を含むことがわかった。以上は、「蜘蛛の糸」に対する、核クライマックス説に基づくクライマックスの所在は、二瓶の定義、生野の説による所在とおおむね一致しており、かつ、かかる所在は通念上におけるクライマックスの場所でもあることがいえる。当該核＝クライマックス説による分析は、本作品においては有効であった。

さらに本稿では、「蜘蛛の糸」における、核＝クライマックス説に基づくクライマックスである

X・X'がどのような特徴を持つかの検討をおこなった。本稿の検討によれば、X・X'には、御釈迦様が提示した逆説を犍陀多が受容するか否かの選択が配置されていた。また、かかる逆説の受容の可否が、当該作品では、逆説の否定により構成されていることがわかった。一方、こうした核の部分に逆説の受容の可否が配置された他の作品として旧約聖書の「イサク燔祭物語」があった。ただし、この物語では当該核において、主人公は逆説を否定するのではなく、むしろ肯定した。こうしたキアスムスの核において逆説を受容するか否かが配置された作品が他にもみとめられるかについては今後検証するつもりである。

また、そもそも、どのようなキアスムスにおける核がクライマックスに相当するかについては、かかる因果関係が明確になっているわけではない。筆者としては、かかる因果関係についても調査するつもりである。

一般論として、作品のクライマックスの特定には恣意性が介入する蓋然性がある。この点は、二瓶の定義による分析についてもいえる。本稿で提示したキアスムスに基づくクライマックスの特定は、とりわけ「蜘蛛の糸」においては、かかる二瓶の定義に基づく分析を構造の側面から補強する機能があったといえる。かつ、かかる恣意性を軽減することについては寄与していたといえる。一方、そもそも、どれほどの作品においてキアスムスがみとめられるかが明らかではなく、こうしたクライマックスのよる特定方法の射程がどの程度であるかも明確であるとはいえない。むしろかなり特殊なアプローチである可能性もある。こうした本手法の汎用性についての課題も今後明らかにすべき点である。

## 引用文献

- [1]二瓶弘行. 二瓶弘行の「物語 授業づくり 一日講座」. 文溪堂, 2011.
- [2]上原絵里. お話づくりを通じた文学的文章の読み方指導に関する考察: 物語を楽しむための挿絵を活用したお話作りの実践から. 教育実践研究. 2014, 24, p.37-42.
- [3]荒木秀樹. 文学の授業で「教科内容」をどう教えるか. 山形大学大学院教育実践研究科年報. 2021, 12, p.312-315.
- [4]倉又圭佑. 物語教材における読解力を高める指導方法の工夫: クライマックスの一文検討を通して. 教育実践研究. 2014, 24, p.43-48.
- [5]田中実. 教材価値論のために: 読みのアナーキーを超える. 日本文学. 1994, 43(8), p.40-53.
- [6]望月理子. <語り手>を超える読みをめざして: 『故郷』の授業実践の考察. 全国大学国語教育学会国語科教育研究: 大会研究発表要旨集. 2018, 134, p.187-190.
- [7]大西忠治. 大西忠治教育技術著作集 14: 文学作品「読み」の指導技術. 明治図書出版, 1991.
- [8]阿部昇. 国語力をつける物語・小説の「読み」の授業: 「言葉による見方・考え方」を鍛えるあたらしい授業の提案. 明治図書出版, 2020.
- [9]跡上史郎. 新美南吉「あめ玉」のクライマックスに関する二つの捉え方. 熊本大学教育学部紀要. 2014, 63, p. 1-7.
- [10]柿原妙子. <視ること>をみつめる: ソネット 148 と光学のレトリック. リーディング. 2011, 32, p. 2-12.
- [11]岩谷智. アポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』の比喩の特徴. 西洋古典論集. 1991, 9, p. 31-50.
- [12]松村一男. 三つの構造: キアスムス, プロップ, レヴィ=ストロース. 和光大学表現学部紀要. 2020, (20), p. 79-98.
- [13]Luter, AB et al. Philippians as Chiasmus: Key to the Structure, Unity and Theme Questions. New Testament Studies. 1995, 41(1), p. 89-101.
- [14]大林太良. 異郷訪問譚の構造. 口承文芸研究. 1979, (2), p. 1-9.
- [15]大喜多紀明. 文体事象以外におけるキアスムスの様態の広がり: 事例としての状況対応型リーダーシップモデル. 人文×社会. 2021, (3), p. 115-141.
- [16]芥川龍之介. 芥川龍之介全集 2. 筑摩書房, 1986.
- [17]Welch, JW. "Chiasmus in the New Testament". Chiasmus in Antiquity: Structures, Analyses. Gerstenberg, 1981, p. 211-249.
- [18]McCoy, B. Chiasmus: An Important Structural Device Commonly Found in Biblical Literature. Chafer Theological Seminary Journal. 2003, 9, p. 18-34.
- [19]森彬. ルカ福音書の集中構造. キリスト新聞社, 2007.
- [20]Shi, H. Chiastic Structure of the Vessantara Jātaka: Textual Criticism and Interpretation through Inverted

- Parallelism. *Buddhist Studies Review*. 2015, 32(1), p. 143-159.
- [21]大喜多紀明. 宮崎駿による長編アニメーション映画「もののけ姫」の構造:キアスムスの核の機能. *人文×社会*. 2021, (2), p. 129-142.
- [22]山下沙織. 「行きて帰りし物語」絵本の研究(1):「円環型」のお話の分析. *お茶の水女子大学子ども学研究紀要*. 2017, (5), p. 17-26.
- [23]E・アウエルバッハ(篠田一士, 川村二郎 訳). *ミメシス 上:ヨーロッパ文学における現実描写*. 筑摩書房, 1967.
- [24]Obobakirova, VV. Chiasmus in William Shakespeare's Plays. *American Journal of Language, Literacy and Learning in STEM Education*. 2023, (2993-2769), 1.9, p. 192-194.
- [25]大喜多紀明. 芥川龍之介『トロッコ』の裏返し構造:良平の「新生」場面の機能. *国語論集*. 2018, (15), p. 45-52.
- [26]生野金三. 『蜘蛛の糸』の材源をめぐって. *人文学教育研究*. 1991, 8, p. 31-37.

### Abstract

The central element of chiasmus has the function of indicating the climax. In this paper, an analysis of Ryunosuke Akutagawa's short story "The Spider's Thread" was conducted to determine if it follows the structure of chiasmus and whether the central element of the story could indeed be considered a climax. As a result, it was confirmed that "The Spider's Thread" follows the chiasmus structure, and its central element serves as the climax. Considering this climax in comparison with the generally accepted range of climaxes revealed some minor differences, but overall, they were found to be largely the same. According to the discussion in this paper, it was revealed that the choice of whether *Kandata* accepts the paradox presented by *Oshaka-sama* is positioned within the central element of the chiasmus, indicating its significance in determining the climax of the work. This paper is also a tentative essay that offers a new methodology for the analysis of Japanese novels.

(受付日:2024年5月1日, 受理日:2025年2月18日)



大喜多 紀明 (おおぎた のりあき)  
現在:やぐら遺跡伝承文化研究会代表

プロフィール:

やぐら遺跡伝承文化研究会代表 (2011年~現在まで).

1965年神奈川県生まれ. 東京工業大学大学院総合理工学研究科電子化学専攻修士課程修了. 団体職員. 専門は有機化学であったが, 2004年以降の専門は文化人類学・民俗学. 現在は特にキアスムス論を前提とした文学研究をおこなっている.

主な論文:

大喜多紀明. アイヌの子守歌(イヨンルイカ)についての考察:心性が継承される直接的なプロセス. *京都民俗*. 2013, (30/31), p. 143-158.

大喜多紀明. 新約聖書「ガラテヤ人への手紙」における裏返し構造:Blighのキアスムス構造を前提として. *人間生活文化研究*. 2023, (33), p. 561-574.